

義務教育学校のメリット・デメリット

	メリット	デメリット
学校運営	◆一人の校長による学校運営で、一貫した方向性のもとでの9年間の義務教育 ◆各教科・探求学習の系統的・継続的な学習指導 ◆教員の人材育成・資質向上への期待 ◆【学年の区切り】「6-3制」に拘らず、「4-3-2制」や「5-4制」などの変更可能	◆原則、小中両方の免許状所有が必要 ◆大規模校の場合、校長1人体制では円滑な学校運営困難 ◆登校時間、授業時間(小45分・中50分)が違う ◆小1と中3では年齢差があり、縦割り班活動に苦慮
学習	◆教科内や教科ごとの学習内容を意識した学習指導容易 ◆学習の順序や内容の入れ替え、先取りや後戻りが可能 ◆中学校教員による小学校高学年等への教科担任制 ☆中学校の先生が小学校で教えることが可能	◆転校生は義務教育学校の授業への戸惑い
児童生徒	◆中1ギャップの緩和 ◆9年間を通した学習規律・生活規律の定着 ◆異学年交流による精神的な成長 ☆お手本となる中学生を見ながら過ごせることは小学生にとって大きな教育効果が上がる ◆特別支援教育において、9年間の連続した指導や支援	◆小学校卒業時の達成感、中学校入学時の期待感が少ない ◆小1と中3では年齢差があり、下級生が上級生に委縮 ◆思春期・反抗期の生徒の姿に接することによる低学年への悪影響 ◆9年間同じ顔ぶれで、人間関係が固定化 ◆リーダーシップを養う機会の減少
その他		◆複数の小・中学校が1つに整理されることで地域の学びの拠点が失われてしまう

義務教育学校になったら

	義務教育学校では		対 応 策
入学式	小	入学式 ○	・成長の節目を大切にする機会をつくる 例：2分の一成人式（小4） 立志式（中1）
	中	入学式 ×	
卒業式	小	卒業式 ×	・子どもたちにとって必要な小・中のステップは残り、中学校進学という大きな節目にあたっては、学校行事を工夫するなど、子供たちが心機一転できるような機会を大切に考える。例：修了式(小6)
	中	卒業式 ○	
部活動	南佐久郡 6 町村が連携して、各校の部活動から地域クラブ活動へ移行を進めています。義務教育学校になっても、7 年生～9 年生は地域クラブ活動を行っています。		

1. 学校の形態

	教育の質(児童数)			通 学			地域とのつながり			5段階評価		総括的評価
	メリット	デメリット	デメリットの解消策	メリット	デメリット	デメリットの解消策	メリット	デメリット	デメリットの解消策			
(1)現 状	【教育環境・行事】 ◆きめ細やかな教育の実現 【人間関係】 ◆一人一人の活躍の機会が多い	【教育環境・行事】 ◆10人未満の学年の出現 ↓ 多様な意見や考えが出ずらい ◆中学校は村費教員が多い 川上村と兼務(図工・技術) ◆現状の運動会や音楽会の継続が困難 【人間関係】 ◆人間関係が狭く、固定化し易い ◆中1ギャップ ◆大人の手が入り過ぎて自律しづらい	【教育環境・行事】	【教育環境・行事】 ◆徒歩通学orスクールバス通学で30分以内の登下校	【教育環境・行事】 ◆3校あるため、スクールバスが制約した運行 ◆スクールバス通学のため課外活動に支障を期す(始業前・放課後の活動) ◆学校から遠い集落の配慮ができてにくい	【教育環境・行事】	【地 域】 ◆地域の近くに学校がある ↓ 地域の中心となる存在 ↓ 地域の寄りどころ	【地 域】 ◆各学校ごとに地域とのつながりに格差がある ◆各学校ごとに地域へのアプローチ必要 ◆それぞれの学校にコミュニティースクールがあり、横のつながりが薄い ◆小学校では地域との関わりが持てたが、中学校との関わり減少	【地 域】	教育的効果		
(2)小学校のみ統合	【教育環境・行事】 ◆きめ細やかな教育の実現 ◆10人以上の学年の出現 ◆教科担任制の導入 【人間関係】 ◆一人一人の活躍の機会が多い	【教育環境・行事】 ◆小中連携がしづらい ◆現状の運動会や音楽会の継続が困難 ◆中学校は村費教員が多い 川上村と兼務(図工・技術) 【人間関係】 ◆人間関係が狭く、固定化し易い ◆中1ギャップ(★1)	【教育環境・行事】	【教育環境・行事】 ◆スクールバスによる安全な通学確保	【教育環境・行事】 ◆長い通学時間 ◆通学範囲の広域化 ◆スクールバス通学のため課外活動に支障を期す(始業前・放課後の活動) ◆小中別の運行ルート	【教育環境・行事】	【地 域】 ◆学校区の広域化 ↓ 関わってもらえ地域の方が増加	【地 域】 ◆地域から学校がなくなる ↓ 地域の中心的役割 消滅 ↓ 地域の関わり少なくなる ◆小学校では地域との関わりが持てたが、中学校との関わり減少	【地 域】	教育的効果		
										経済的効果		
										地域の価値を上げる効果		
(3)小・中学校統合	【教育環境・行事】 ◆柔軟性を意識した小中一貫教育の実現 ◆きめ細やかな教育の実現 ◆9年間を通した継続的な児童・生徒への指導 ◆義務教育学校の教育の特例(★2) ◆学年段階区切りを6・3制以外に変更可能 ◆子供に関わる教職員が増える ◆小中兼務できる教科担任制の導入 【成長・発達】 ◆異学年交流による精神的な発達 ◆多様性を受け入れることが容易 【人間関係】 ◆中1ギャップの緩和	【人間関係】 ◆人間関係が9年間固定化し易い ◆小1と中3では差があり、交流に課題 ◆低学年の児童が委縮する可能性 ◆中学生の非行による小学生への悪影響の恐れ 【成長・発達】 ◆小学校卒業の達成感がない ◆中学校の新鮮さがない ◆リーダーシップや自主性を養う機会が減る	【人間関係】	【教育環境・行事】 ◆スクールバスによる安全な通学確保 ◆スクールバス増車による細やかな通学手段の確保 ◆小中学生と一緒に登校	【教育環境・行事】 ◆長い通学時間 ◆通学範囲の広域化 ◆スクールバス通学のため課外活動に支障を期す(始業前・放課後の活動) ◆学校から遠い集落の配慮ができてにくい	【教育環境・行事】	【地 域】 ◆学校区の広域化 ↓ 関わってもらえ地域の方が上記(2)よりさらに増加 ◆小中ひとつになることで集団が大きくなる ↓ 地域との関わり・経験ともに幅が広がる	【地 域】 ◆地域から学校がなくなる ↓ 地域の中心的役割 消滅 ↓ 地域の関わり少なくなる	【地 域】	教育的効果		
										経済的効果		
										地域の価値を上げる効果		

★1…中1ギャップとは、小学校を卒業し中学校へ進学した際にこれまでの小学校生活とは違う新しい学校環境や生活スタイルになじめず、授業についていけなくなったり、不登校やいじめが起こったりする現象。

★2…義務教育学校では、9年間で1つの「学びの場」と考えるため、指導内容や基準をかえることはできませんが、子供たちの実態や理解の程度、9年間の指導内容の系統性を考えて、小中共通の教科を柔軟に捉え、実践することが特例として認められています。

「5段階評価」の目安

5(効果が非常に高い)	4(効果が高い)	3(一定の効果が見込める)	2(効果が低い)	1(効果が見込めない、マイナス効果)
-------------	----------	---------------	----------	--------------------

書写教育を通して、個性豊かな人づくりを！

聖霊女子短期大学教授 栗森 貢

先日、日本文学の講義の中で、紀貫之の『土佐日記』を取り上げました。有名な冒頭の部分を原文で読んだあとで、「日記、女性、仮名文字」について考えさせ、仮名文字で書かれた写本の一部をコピーして配布しました。反応は様々でしたが、原文と重ねて読み合わせながら、「読めた、読めた」と喜び、「仮名文字は美しい」と感動していたことがとても印象的でした。

子どもは書写の授業を楽しみにしていますか？

私は36年間の教員時代を過ごしましたが、国語科と書写の授業に打ち込んできました。準備や後片付けに時間がかかり、50分授業の中で実際に書くために使えるのは30分くらいでしょうか。

子どもが書写の時間を楽しみに思えるのは、どんなことからでしょうか。考えてみました。

- どんな文字を書くのが楽しみ
- どんな方法で書くのが楽しみ
- どうしたら上手く書けるのが楽しみ
- 前よりも上手く書けるようになってうれしい
- ◆友達から何て言われるか(評価・感想)不安
- ◆先生から教わったようにできるかが心配
- ◆うまい人と比べられるのがイヤ

こう考えるとよいことばかりでなく、不安なことやイヤなこともあることが分かります。

先生は「書写の授業をやる」と腹を括り、子どもに書く楽しさを与える方法を考える

(1) 小学校だったら、週1時間は書写の時間を時間割に明記することです。おそらくどの小学校のどの学年でも実施していると思います。覚悟を決めることです。中学校は、年間指導計画の中に確実に時期と内容を盛り込み実施することです。計画性と覚悟が大事です。

(2) 1単位時間の目当てを一つにし、教科書の解説や指導のポイントを参考にすることです。教科書や指導書には大事なポイントが分かりやすく書かれています。また、毛筆などは、先生が直接水書板に大きな筆で文字を書かなくても、指導書に入っている毛筆動画では模範的な運筆方法で整正文

字を書いています。それを何度も見せて、始筆・送筆・終筆の筆使いや穂先の向きなどを理解させたいのです。これを使わない手はありません。使い方が分かれば、今度は子どもが必要に応じてタブレット端末で教科書上のQRコードを読み取って動画を確認することができれば、主体的で対話的な学び合いができるのです。どの学年でも長期的かつ計画的にそういう学びに向かうことができるのです。

(3) 書写で学んだことが他教科の学びに生かされたり、学校行事で活躍の場が与えられたりしたら子どもの主体性や意欲は限りなく広がり、豊かな人づくりにつながると思います。



男鹿南中時代 文化祭で生徒が書道パフォーマンスを披露

これからの書写教育に期待すること

それは、幼・小・中・高とそれぞれの校種が相互に関連し合い、それまでの学びを踏まえた指導を展開し、我が国の言語文化の担い手となる日本人を育成することに他なりません。正しい日本語を読み、書き、表現し、継承していくのは、目の前にいる子どもたちなのですから。

栗森 貢 (くりもり みつぐ)

新潟大学教育学部卒業。昭和57年から6年間新潟県の中学校教諭、昭和63年から30年間秋田県の中学校の教員。平成30年3月男鹿南中学校校長を最後に退職。平成30年4月から令和3年3月まで男鹿市教育長を務める。令和4年4月から現職。



学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ
教育出版株式会社

発行：教育出版株式会社 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 7F
電話 022-227-0391 FAX 022-227-0395 担当/佐藤 寛
E-mail h-sato@kyoiku-shuppan.co.jp

本資料は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、一般社団法人 教科書協会が定めた「教科書発行行動規範」にのっとり、配布を許可されているものです。



秋田発教育情報 NEWS LETTER

小中一貫教育の充実のために

第2回 — 義務教育学校の課題にも目を向けて —

秋田大学大学院教授 田中 誠祐

1. はじめに

前号では、6・3・3・4制の単線形の学校制度見直しの背景、義務教育学校の制度、特色ある取組として高知市立土佐山学舎の取組を紹介しました。このような事例に触れると、義務教育学校は素晴らしい、義務教育学校に移行すべきだと主張しているように感ずるかもしれません。しかし、物事には必ず光と影、メリットとデメリットがあります。小中連携の有効性は広く認識されていますが、義務教育学校にすることによってかえってマイナスになるところもあり得ます。

本号では、義務教育学校に関するマイナス面の先行研究にも目を向けながら、県内の状況についても紹介したいと思います。

2. 想定されるデメリット

義務教育学校の設立準備段階において、各自治体は、中1の壁の緩和・解消、系統性を意識した一貫カリキュラムによる教育の充実、異学年交流による精神的な発達、保護者・地域の協力体制の強化等をメリットとして挙げています。一方、課題としては次のようなことが想定されてきました。

●リーダーシップや自主性を養う機会の減少

小学校6年という学年は重要で、児童会や学校行事等で学校のリーダーとして後輩の見本となり、学校を牽引する経験を行うことが可能でした。ブロック制でも、各ブロックの最上級生として活躍ができるとはいえ、従来の小学校6年生と同等の経験をする機会は少なくなることが懸念されます。

●9年間で人間関係が固定化

義務教育学校になると基本的には9年間同じ学年が持ち上がることになります。これまでも小規模校においては、中学校段階で複数の小学校の合流がない場合に同様の課題が指摘されていました。ただ、義務教育学校の場合には、同じ校舎、同じ同級生、同じ先生と変化が少ないため、これまで以上に固定化した9年間になってしまう恐れがあります。

●成長の節目

小学校卒業の達成感、中学校に入学するという新鮮さがこれまでに比べて弱くなることが予想されます。小学生から中学生になるギャップが問題だという考え方の一方で、そのギャップこそが成長に重要な意味をもつのだと主張する人もいます。小学校課程修了式、立志式、ブロック修了式等により、どれだけ成長を実感する機会、感動の場を創出できるかが課題となります。

●発達段階の差、小中学校の文化の違い

小学校1年生と中学校3年生には幼児と大人といったよいほどの差があり、様々な活動においてより多くの配慮が必要になります。教員にとっても、小学校教員と中学校教員で文化祭等の諸行事で求めるものに大きな違いがあります。小学校文化、中学校文化を融合し新たな文化の創造につなげることは簡単ではありません。教員の側から、ものの考え方や仕事の進め方等について不協和音が出てくるのが懸念されます。



3. 客観的な調査から

(1) 小中一貫教育実態調査

先号でも紹介した文部科学省実施の実態調査では、小中一貫教育に取り組む1130校のうち、8～9割でその成果を認めていることから、義務教育学校の制度化への大きな根拠となりました。ただ、この調査は全国教育委員会、学校を対象にしたもので、今後さらに多様な対象で実態を把握することが望まれます。例えば、児童生徒、保護者はどのように捉えているか、という視点は重要です。また、学校回答の場合は、回答者が教頭等の場合が多く、それが一般の教職員の認識を表しているかの検証も必要です。また、小中一貫教育推進に課題があると回答した学校も8割程度あったことから、義務教育学校ではそれらの課題をどのように克服しているかの調査も必要です。

(2) 小中一貫教育の実証的研究

梅原、都築、山本等(2021)¹は、子どもの意識調査を実施し、その結果をまとめ刊行しています。そこでは、小中一貫教育が効果的であるとは必ずしも言い切れないという結果になっています。

例えば、都築によれば、施設一貫型小中一貫校の小学生(4～6年生)は、施設分離型小中一貫校や非一貫校の小学生よりも、学校適応感やコンピテン스가低い傾向が見られます。その一つの可能性として、施設一体型が設置後まだ間もないということを挙げており、この点についてさらに長期的に調査することが必要です。また、施設一体型小中一貫校において、学校規模により学校適応などに差異が存在するとし、小規模校から中規模校、大規模校へと拡大することによって、学校適応感が低下していくと述べています。

金子は、一貫校では小学校教育の中学校化が生じている可能性について触れています。一貫校では、4、5年生段階では、共同体感覚、援助行動、リーダーシップ、学習への取組、向学校的行動等の高さが目立ちますが、6、7年生では、反対に非一貫校より低くなる傾向がみられます。このことから従来型の非一貫校において小学校6年生で最上級生の経験を積む発達の

意義について、今後検討することの必要性を述べています。

このように、様々な効果を期待し小中一貫教育が推進されているものの、それは施設一体型の義務教育学校を設置するとすぐに実現できるというものではないようです。その実現のためには、超えるべきハードルがあり、その成果が目に見えるまでにはそれ相当の時間を要することが窺えます。このような先行調査を踏まえながら、秋田県の現状についてみてみましょう。

4. 秋田県の義務教育学校

(1) 井川義務教育学校

平成10年代の平成の大合併において、当初、井川町も合併協議会に参加していたといいますが、「地域に学校だけは残したい」という熱い思いから合併は流れたといえます。その思いを引き継ぎ平成30年に開校したのが井川義務教育学校です。令和4年3月、井川町教育長六郷博志氏を訪問し、いろいろとお話を伺うことができました。

六郷氏は、「最初の年、苦労しましたよ」と率直に語ってくださいました。「義務教育学校で生活できてよかった」というアンケートに、(1～6年生は8割以上ではあったが)7～9年生は4割弱。9年生からは、「下学年の世話ばかりさせられる」「行事で我慢を強いられる」「卒業式に低学年は参加しないでほしい」という記述があったといえます。それが年々改善し、開校3年目には7年生以上の満足度も8割を超えるようになります。また、3(2)で述べた都築らの調査を実施したところ、すべての学年で全国の一貫校・非一貫校を上回るまでになったのです。この傾向は、保護者も同様です。「義務教育学校になってよかった」という問いに、平成30年度は約1/3が否定的(特に9年生の保護者の半分は否定的)でしたが、令和2年度以降は肯定的に回答する人が9割を超えるようになります。

どのような課題が改善したのでしょうか。六郷氏は、いくつかの課題と改善状況を語ってくださいました。ここでは特に印象深かった2点について簡単に述べます。

(2) 6・3制の壁

当初、井川では学年の区切りを4・3・2のブロック制でスタートしました。ところが、それまで馴染んだ

6・3制の壁の克服は容易はなく、特に5～7年生ブロックの指導が困難だったようです。5～7年生ブロックは、小中の連結部分で、制服、授業時間、児童会・生徒会活動、部活動など、指導が複雑です。

そのため、井川では6・3制の壁を一気に越えようとするのではなく、4・2・3ブロック制により緩やかに克服することとしました。4・3・2制は一貫校の大きなセールスポイントだっただけに苦渋の決断だったようです。ただ、これにより、児童会・生徒会活動を始め、諸活動が前中期・後期でうまく機能することになります。このことは、次に述べる小学校文化、中学校文化の克服という点では課題を持ち越すこととなりますが、初年度の課題解決としては現実的な判断でした。

6・3制でないと、「6年生のリーダー性が育ちにくい」、「後期生が中学生らしくない」といった問題を指摘する人がいますが、4～9年生を対象としたリーダー性調査では、8年生を除く学年で高い結果となっており、4・2・3ブロック制で十分効果があるようです。

(3) 意識の問題

当初、9年一貫に不満をもっていた子どもたちの意識の改善には、時間が必要だったということが出来ます。2年目になると特に中学生の認識が大きく改善し、「1年生から9年生まで仲のよいのが学校の特色」といった記述が増えてきます。生活空間・学習空間を日常的に共有し、時間をかけて交流を重ねることで、幅広い年齢集団を肯定的に捉えることができるようになったようです。また、学校応援協議会の活動、2年目の文化祭で披露し『井川賛歌』の全校合唱等により、学校、地域の一体感がさらに強くなり、それが子どもたちや保護者の意識をさらに向上させるという好循環にもつながっています。



井川義務教育学校 学校祭『井川賛歌』を歌う様子(2019年9月14日)

意識の面で最も戸惑いが大きかったのは教職員のようです。各教師は長年にわたって培った小学校文化、中学校文化を背負って井川義務教育学校に赴任します。言葉遣い、指導の仕方、子どもの捉え方、部活動等の様々な点で、それぞれの見方・考え方に違いがありますし、多様な信念をもっています。井川義務教育学校には約30名の教職員がいますが、人事異動が繰り返される中では、時間をかけながら義務教育学校としての教員文化を創造・継承していくことが必要と考えます。

5. おわりに

何事においても新しいシステムの導入や変更は容易なことではありません。本稿では、小中一貫教育のメリットというよりはデメリットに視点を当てて先行研究を紹介し、県内ではどのような状況かを述べてきました。

井川義務教育学校では、初年度その困難さを実感しながらも、教育委員会、学校の取組により確実に効果を上げてきています。「施設一体型一貫校であれば、大規模校より小規模校の方が効果が期待できる」という先行研究を裏付けるものでした。

六郷氏は、義務教育学校は子どもにとってメリットが大きいのはもちろんであるが、同時に教員にとって教育に対する認識を変える大きなチャンスであるといえます。令和5年からは県内の義務教育学校が3校²になります。今後、義務教育学校を経験し9年間の広い視野から子どもの育ちを考えることのできる教員が増えてくるとも、秋田県教育にとって大きな可能性につながると期待しています。

² 井川町立井川義務教育学校に加えて、北秋田市立義務教育学校阿仁学園、藤里町立義務教育学校藤里学園の2校が開校

田仲 誠祐(たなか せいゆう)



専門は、数学教育学、教師教育学、教育方法学。公立中学校及び秋田大学附属中学校で数学教師、秋田県総合教育センター、義務教育課で指導主事、主任指導主事、副主任歴任。令和2年度から、秋田県算数・数学教育研究会会長。教育出版「算数」「数学」教科書編集委員。

¹ 梅原利夫、都築学、山本由美、他『小中一貫教育の実証的検証——心理学による子ども意識調査と教育学による一貫校分析——』(2021、花伝社)